



ヨーロッパにおける漢字受容の初期形態について

東日本国際大学東洋思想研究所准教授 関 沢 和 泉

I はじめに

フランスの精神分析家ジャック・ラカンは、一九六三年と一九七一年の二度来日し、それぞれ感想を直後のセミナー（参加者による質疑応答や発表も含まれるが、基本的には日本の制度で言う講義に近い）において語っている（以下、基本的な情報は佐々木（二〇〇七）、第二部による）。とりわけ二度目の来日は、ラカンに、文字、シニフィアン、デイスクールと無意識の関係という彼の精神分析理論の基本的な要素について再考の機会を与えた様であり、小論「リチュラテール」として、その一部が早くに出版された一九七〇年から一九七一年の一八番目のセミナーだけでなく、彼の主著である『エクリ』が邦訳される際に寄せられた日本の読者への序文の「日本人には精神分析は必要ない」というテーゼへと繋がっていく。

しかし私達がここでラカンの来日から始めたのは、記号学者ロラン・バルトのオリエンタリズムの香りの強い日本論から距離を取ろうとしつつ彼が展開している日本文化論の全体を取り上げるためではなく、そこでラカンが「日本人には精神分析は必要ない」と結論する際に、彼が日本における漢字のあり方をどのように理解したかが重要な鍵となっているからである。分かりにくい文章でもあるため、長めに引用してみたい。ラカンはその序文を次の様に始めている。

私〔の本〕が日本語に翻訳されるということに、私は戸惑っています。というのも、私に可能な範囲ですが、かじったことのある言語だからです。

私は、この言語を高く評価しています。この言語は、

非常に洗練された社会的な絆をその談話のうちには保持しますが、その完璧さを、私は知っているのです。

このように、自らが日本語についてある程度の知識があることが、まず示されている（フランス語原文は現在 *racine* (二〇〇一) に、邦訳はラカン (一九七二) だが、以下文脈に合わせて邦訳は多少修正している)。そして、彼の談話についての理論を少しばかり展開した後、次の様に続ける。

無意識というもの—それがどのようなものであるかを知るためには、この『エクリ』に「ローマ講演」として書き留められている談話を読んでください—は言語活動 (un langage) として構造化されている、と私は言っているのです。

無意識は、日本語が形作られる際の割れ目を完璧に塞ぐことを可能にしています。それはあまりに完璧であるので、私は、ある日本女性が機知 (訳注 フロイトとラカンにおいては、意図せずして、無意識の真理を明らかにする言葉の戯れ、ある種の言葉遊び、掛詞、駄洒落) とはどのようなものであるかを (期せずして) 顕わにする場面 (la découverte) に居合わせることができました。それは大人の日本女性でした。

これによって証明されるのは、日本において、機知は、普段あたりまえに発せられている談話と拮抗りを同じくするということであり、それ故、日本語という言語に住まう住人の誰一人として精神分析されることを必要としないのです。ただし、パチンコやスロット・マシーンとの関係を整理し、あるいはより端的に機械仕掛けであるかのような顧客達との関係を調整するといった目的を除けば。

真に話す存在にとつては、「訓読み」(が、実のところ何) を「言わんとしているか」註釈するのに、「音読み」で十分なのです。音読みと訓読みを繋ぎ合わせるペンチ (である漢字) は、真に話す存在の幸い (bien-être) です。というのも、おかげで音読み・訓読みは (圧着され)、焼きたてのワッフル菓子のごとく作りたてで出てくるからです。

どのような人々も、自らの言語のなかで中国語を話す—それによって、自らの言語を、中国語を通して話される言語 (dialecte) (訳注 dialecte を、語源を意訳した表現と見て訳す) とする—などという幸運はもたせませんし、何よりも—そしてより重要な点ですが—、全く異なった言語から文字を受け取ることによ

間であっても明らか (tangle) にしてくれるように
したことなどないのです。……

〔傍線および「」内の注記は筆者による〕

ラカンによれば、(ここで指摘されている限りで) 日本語以外では、稀にしか起こらない、無意識の真実を顕わにする言語活動である機知が、日本語では極めて日常的な発話のほぼすべてを覆うかのように生じている、というのも、精神分析がそれぞれの発話を分析するまでもなく、漢字がベシチとして「訓読み」と「音読み」を繋ぎ止めていることで「音読み」が「訓読み」を註釈してくれるからだ、というのである。

何故「音読み」が「訓読み」を註釈するのであり、逆ではないか、という点は確かに分かりにくい。というのも、おそらく直観的に日本語話者が思い浮かべるのは、会話の中で耳にしただけでは分かりにくい漢語表現を、訓読みで言い換えるケースであるだろうからである。この註釈の方向性の問題について、『エクリ』翻訳者である佐々木孝次は、翻訳から三〇年以上を経てこの序文を解説する際に、ここでラカンは日本語話者が思い浮かべるようなケースの逆を示しているのではなく、「音読み」と「訓読み」は相互に註釈するという意味だとしている(佐々木二二〇七、二六六

頁)。

しかし、より説得的な解釈は、評論家山城むつみが「文学のプログラム」(山城一九九五―二〇〇九)、一七七一―二二八頁)で提示しているものであるだろう。彼は、例えば「よむ」という音が、「読む」であり「詠む」であり、他にも多くの漢字があてられてきた事実に触れ、たとえそれらが語源としては同じであっても、「うたをよむ」と聞けば「歌を詠む」と理解され、「歌を読む」とは通常理解されない、つまり別の言葉として了解されていることを指摘する。このような現象こそラカンが指摘している問題ではないか、として、次の様にラカンの主旨を要約している。

……日本語においては(「訓読みによる音読み」の註釈)と(「音読みによる訓読み」の註釈)と「両方の可能性があるにもかかわらず、ラカンが特に後者に注目したのはなぜだろうか。と問うことで気になってくるのは、音読みにより訓読みを註釈するという場合、この註釈において隠れた核となっているのが文字の機能だということである。「よむ」という音声の下には外来の文字(読、詠、数、節、誦、訓などの漢字)の力が暗に働いている。だからこそ「音読みは訓読みを註釈するのに十分」たりうる。(同、一八〇頁)

すなわち、ラカンがここで音読みと言っているのは、漢字の外來の文字として意味を担うものであるという側面であり、訓読みと言われているのは、日常の話において語が出現する際の音声的側面ではないか、ということである。ここから山城は分析を展開し、日本の訓読というシステムは、日本語の音声を外來の文字と構文で書くことで、日本語の「文」に、ある分裂を導入するだけでなく、外來の「文」化を、その異質性を緩和しつつ同文化させるシステムなのではないか、と結論している。ここには、確かになるほどと思わせるものがある。

日本語と呼ばれる言語において、あるいは日本語と今日呼ばれている言語が形作られていく中で、漢字がどのような役割を果たしてきたかについては、他にも、思想的観点から例えば子安（二〇〇三）といった詳細な分析が存在している。漢字と日本語の関係について考察するには、こうした内在的な分析が必要であるだろう。

しかし、今回漢字を問題にしたいのは、やや異なった観点からである。例えば、ラテン・アルファベットで表記されるフランス語を母語とする上述のラカンは、主体との関係でことばと文字が果たす役割に大きな重要性を認めているが、何故これほどまでに日本語の表記体系に、何か奇妙

なもの、精神分析を不要とさせるほど特異なものを感じたのであろうか。どのような背景がラカんに、日本における漢字の働きに文字のあり方として特殊な点を見いださせたのだろうか。ラカンはやや独自に作り直されているとはいえ、フェルディナン・ド・ソシユールとローマン・ヤーク・ブソンに由来する現代の言語学的・記号学的な知識を背景として、これらの問題にアプローチしている。しかし、そこには、どこかオリエンタリズムの影が潜んでいる。そして、同意するにせよ、反論するにせよ、そうした議論を前提として語る際、私達もまたオリエンタリズム的な視線に／を同化してしまう危険がありはしないだろうか。

ラカンがこうした分析を記していたのと同じ頃、フランスの哲学者ジャック・デリダも、直接日本語における漢字の問題を取り扱っている訳ではないが、アルファベット・表音文字を用いる文化圏の哲学者達が、アルファベットとは違う文字に対して、それらにどのように魅了されつつも否定してきたかを様々な機会に分析している——例えば、原著が一九六七年に出版された『グラマトロジーについて』や一九七二年の『哲学の余白』において。デリダ自身の慎重な分析について取り上げるのは別の機会としたいが、この時期の彼がしばしば肯定的に援用するライブニッツは、中国の漢字にある種の理想的書記システムを見てい

るところがある。しかし、ライブニッツと同様のことは、その少し前の宣教師達が見出したものに見出すことが出来る。では、オリエンタリズム的な要素があるにせよ、そうでないにせよ、アルファベットによる言語の表記を当たり前としてきた人達には、漢字というものはどのように映ったのか。本稿では、それをライブニッツ以前の最初の接触にまで遡って確認することで、将来描かれるべき長い系譜へと開いてみることを試みたい。

だが、この問題は、単に哲学的・思想的な問題に留まるものではない。

現在、日本語教育の現場においては、いわゆる「非漢字圏」の学生に、どのように漢字を教えるかが大きな問題となっている。非漢字圏の学生が直面する困難とはどのようなものだろうか。例えば、学習の初期に、曜日を漢字でどのように書くかを学習した際に、「き」という音は全て「木」と、「か」は「火」と書くのだと理解してしまい、文中のすべての「き」と「か」の音を「木」と「火」で書いてしまうといった事例が報告されている(ヴォルビヨワ(二〇一四b)、一〇二頁)。また、例えば「人」という漢字を「ひと」として学習した後、「日本人」や「三人」を学習していく際に「人」という漢字の読み方の違いに学生が混乱するが、そこには

そもそも「音読み」「訓読み」という概念自体の理解が困難であるという問題が存在しているとも報告される(カイザー(二〇〇二)、三九―四〇頁)。実際に、日本語非母語話者、とりわけ「非漢字圏」の学生に日本語を教えた際に、そうした問題に直面したことがある教師は少なくないだろう。ここには(日本語における)漢字の、表音文字(音節文字)圏出身者にとつての捉えがたい姿というものが存在しているように思われる。

これらの問題に対して、表意的な記号とされる漢字自体が潜在的に有している論理的構造を明示化することで、学習者の習得を容易にすると言う研究も進んでいる(例えばヴォルビヨワ(二〇一四a)、山田ボヒネツク頼子が中心にソフトウェアとして実装された KanjiKreativ <http://www.kanjikreativ.com/> 等)。こうした研究・実践は大きな成果をあげつつあるようだが、アルファベット(表音文字)を用いている文化圏の哲学者達が、漢字をどのように理解したのか、その最初の接触の場面を追うことは、表音文字を表記に用いている文化圏の出身者が、漢字を前にした場合に、その違いをどのように理解しうるのかのモデルを示してくれるのであり、西洋が漢字に最初に接触した際の記録を追うことは、こうした実用的な観点からも無駄ではないと思われる。

II アリストテレスにおける書字記号

以下で見えていく漢字受容の背景に、アリストテレスに遡る書字記号観がある（ここでは書かれた記号について書字記号という表記を用いる）。それは長い間、西洋の言語観、記号観を規定してきたものである。次章以降、とりわけIV章とV章の前提となる議論であるため、簡単に確認したい。

問題となるのは、アリストテレスの『命題論』冒頭部である。この著作は、(他のアリストテレスの「著作」と同様に)タイトルについても問題があり、実際に西洋で長く読まれたボエティウスのラテン語訳における翻訳表現の問題もあるが²⁾、ここでは冒頭部における書字記号と音声記号と心的イメージ、そして外的事物の関係を簡単に取り上げたい。『命題論』は探究する主題について語る短い導入の後、次の様に続く。

声に出して話される言葉は、魂において受動的に起こっているものの符号であり、書かれている言葉は、声に出して話される言葉の符号である。そして文字がすべての人にとって同じではないように、音声もすべての人にとって同じではない。これに対して、音声は第一に、魂がもつ受動的なものの記号であるが、この受動的なものはすべての人にとって同じものである。

また魂がもつ受動的なものは事物・事態の類似物であるが、事物・事態はもとよりすべての人にとって同じものである (163 & 早瀬邦訳 (二〇一三)、一二二頁による)。

この部分については様々な解釈があり、厳密には個々の説の検討が必要なのだが、ここでは最も一般的と考えられている解釈に従ってまとめてみよう (早瀬邦訳 (二〇一三)、補注A参照)。

- ① 事物・事態は万人にとって共通である。
- ② そうした事物・事態の印象であり、結果として事物・事態と形相を同じくする (とアリストテレス的な図式では理解されている) 魂における受動的に起こっているもの (概念、心的イメージ) もまた万人に共通である。
- ③ しかし、音声記号は、そうした心的イメージの記号であるものの、それらが記号であるのは言語共同体における規約によるのであり、実際に諸言語が異なっているように、万人に共通ではない。
- ④ また書字記号は、音声記号の記号であり、やはり万人に共通ではない。

このように、アリストテレス自身の記述の順番はやや転倒しているが、事物が認識され、そこから音声記号が、次いで書字記号がという順序で二種の言語記号が導出されてくる関係が描かれている。ここで今回の議論に重要なのは、書字記号はあくまでも音声記号の記号なのであり、音声記号が心的イメージの直接的な記号であるとは異なり、常に音声記号を媒介して機能すると理解されている点である。一般にクラテュロスのと言われる事物の本性を自然に（直接的に）表わしている言語（が存在するはずだ）という観点を避けるアリストテレスにおいては——すなわち、やや単純化して現代的な用語を用いれば、言語記号は恣意的なものであると認識しているアリストテレスにおいては——、このようにして書字記号は、万人に共通の心的イメージから、さらにはそれらの元となる事物・事態から、二重に離れているということになる。書字記号はあくまでも音声記号の記号でしかなく、書字記号が記号として機能するには、必ず音声記号を経由しなければならないのである。

しかしこのような書字記号理解は、一字一字が音声を表わすアルファベットのな書字記号に特有のものなのではないだろうか。とりわけ句読点が発達しておらず、黙読の習慣も一般的ではなかった古代におけるアルファベットの姿

を反映しているに過ぎないのではないだろうか。実際、IV章、V章で見えていくように、漢字を前にして、こうしたアリストテレス的な図式は揺さぶられることになるのだが、同時に確認されるように、この図式は堅固なものとしてヨーロッパの書字記号観の基礎に残り続けることとなる。

III 現代の言語学における漢字

思想的な観点からは寄り道となるが、ここで、現代の言語学において、漢字がどのように捉えられているか、その一端を確認したい。というのも、前節で見たアリストテレスにおける書字記号の問題とよく似た構図が現代の（第二）言語習得理論でも問われているからである。

私達は、前節で、長らく西洋の記号観・言語観を規定し続けた（そして規定し続けている）アリストテレス的な観点において、書かれた語（書字記号）は、何よりもまず音声としての語（音声記号）を指示・意味表示しているということを確認した。これは、書かれた語は、心的な意味表象へと直接繋がっているのではなく、一旦音声表象を介しているということの意味している。では、現代の言語学的な研究の成果によれば、書かれた言葉、とりわけ漢字はどのような経路で、意味する言語記号として私達によって処理され、機能するに至るのだろうか。

はじめに、文字が現代の言語学においてどのような分類されているかを簡単に確認したい。実は異なった基準により幾つかの分類が存在する。しかし、瀬田(二〇〇九、一五五―一五六頁)に拠れば、次の様な分類が一般的だと言う。

絵文字

事物をそれと分かるように書いた絵。

表意文字

事物(あるいはそ)の概念を表す文字で、絵文字を起源としても、元になった事物を表わしていると分らないほど変形されている。一般には漢字が代表例とされるがそれが適切かは議論もある。

表音文字

音声のみを表わす。ただし一文字が一音素を表わす単音文字(アルファベット)と、日本語のひらがな・カタカナのように一文字が一音節を表わす音節文字がある。

表語文字

一文字が一語を表わすものを言う。たとえば S(英語では section)や漢字がそうであると言われる場合がある。ただし漢字の場合は一文字が一語を表わさない場合もあるため厳密には適切でない場合もある。

他に、表語文字、音節文字、アルファベット文字という三つのカテゴリーへの分類を提案する者、思考文字(言語を越えて観念を伝える)と音声文字の二カテゴリーへ分類する者、音を書き記すという観点から、アルファベット、音節文字、表語音節文字(漢字はここに入る)に分類する提案などがある(同、一五六頁)。

ここで注目したい点が二点ある。第一に、漢字の位置はこうした現代の言語学における文字の分類の中でも、アルファベット(単音文字)に比べ不安定であると言っ点である。すなわち表意文字と表語文字に分類されつつも、その分類には異論もある。この不安定な状況は、この後の章での揺れでも見られるように、こうした分類が基本的にアルファベットの的な音声を表わす文字を前提とし、そこから他の種類の文字を記述するという歴史に由来することによると思われる。第二に、そうした混乱がある中で、文字としての漢字の理解には「語を示している」という理解と、「事物(あるいはそ)の観念を表わしている」という、少なくとも二つの理解の方向性があると言っ点である。この二つの理解は、IV章で扱うロジャー・ベーコンの漢字観と、V章で扱う『コインブラ註解』における漢字観にほぼ対応しており、後に見るように、西洋世界における漢字との接触初期から存在する揺れであるが、その痕跡が現在でも見られるので

ある。

第二言語学習の場面に戻ろう。

主に英語の第二言語習得の研究を行っている門田修平は、日本語の漢字に関して、英語との比較で興味深い研究を残している（門田（二〇〇六）、第六章）。現代における実験を通じた言語学的研究ではあるが、この研究は、以下で検討する過去の思想が何を問題にしていたかを明らかにするための一つの補助線となるものである。

さて、現代の言語学において、私達の脳内には自らが知っている語彙の情報（意味に関わる情報や構文に関わる情報）を集めた「心的辞書（メンタルレキシコン）」と呼ばれるある種の辞書があると考えられている。例えば、私達が何らかの発話を聞き、あるいは何らかの文章を読んだ際に、この辞書にアクセスすることで、そこに現われている語の意味等を理解することが出来る、というわけである。ここで門田（二〇〇六）が実験を通して明らかにしようとしているのは、（耳で語を聞くのではなく）書かれた英語の語（綴り）を見た際に、私達は、一度それを（実際に発話しなくても脳内での処理として）音韻表象（ある言語で言語的な単位として理解される音声の表象）として変換した後に、そうした音韻表象を通して心的辞書にアクセスし意味へと変換している

のか、それとも視覚的な情報を音声的な情報に変換することなく、視覚的なデータを元に直接的辞書にアクセスし意味へと変換しているのか、という問題である。彼は、音声情報を通じたルートを「音韻符号化ルート」と呼び、視覚的ルートを「直接的視覚ルート」と呼び、こうした二重のルートが、書かれたものを私達が処理するために心的辞書にアクセスする際に存在していると仮説を立てている。さらに、同じ問題が漢字の場合についてはどのようなになっているのかも実験している。

実験の結果は大変に興味深いものである。結論としては、英語の場合も、漢字の場合も、どちらも「音韻符号化ルート」「直接的視覚ルート」の両者が機能しており、どちらの場合も「音韻符号化ルート」が基本的なルートであることが想定される結果となっている。つまり、通常は「音韻符号化ルート」が活性化され、こちらが主に機能していると考えられる。特に英語の場合は、音韻符号化ルートの方が処理の速度が速い。しかし英語の場合も「音韻符号化ルート」の活動が何らかの理由で阻害されると、「直接的視覚ルート」が活性化することがある（同、一五〇―一五二頁）。では、漢字の場合はどうか。漢字の場合も両方のルートが機能していることが想定される。しかし、漢字の場合には、音韻符号化ルートの方に処理の速度が極めて速いという事実は確

認されず、やや速いという程度に留まる。また、英語の場合とは違った形で「直接的視覚ルート」が何らかの機能を果たしている可能性が示唆される(同、一六三—一六五頁)。

前者の英語の場合の結果は、確かにアリストテレスが示し、西洋の言語思想の枠組みの中で長い間支配的であった「書字記号は音声(表象)を意味表示する」という構図が、実験的にもある程度支持されることを示している。しかし、ここでは同時にそうではないルート、すなわち視覚的表象が直接意味(心的辞書)へと繋がっている可能性も潜在的に存在していることが確認されている。また漢字の場合は、視覚的表象から直接意味(心的辞書)に繋がっている可能性が示唆されつつも、やはり音韻表象を介したルートが重要であるということが確認されている。これらの結果は、脳内の過程において、確かにアルファベットによる表記と漢字による表記の間に何らかの処理の違いがあることを示してはいる。しかし、同時に、基本的な処理は共有されている——具体的には、特にアルファベット(英語)においても文字が直接意味を表示する経路があり、そして漢字においても音韻的経路が重要である——という実験結果は、両者が質的に全く異なった記号であるわけではないことを明らかにし、アルファベットとそれ以外の文字を全く異なった原理による文字であるかのように表象することに

潜む危険性を警告してくれている。すなわち、以下で見えていくような西洋の哲学者による漢字に対する理解の仕方には、やはりアルファベットを当然の前提とし、そこから漢字を見た場合の視線の結果であるという側面があることを警告している。

以上の研究は、脳内での処理を実験を通して再構築するものであり、さらなる実験と検証が必要とされるものではないが、これらによって改めて確保された「アルファベットを当たり前とする立場からの視線」を相対化する立場から、以下、具体的なテキストの検討に入っていきたい。

IV 最初の出会い——ロジャー・ベーコンの時代

はじまりは十三世紀である。

この最初の接触については、実存主義の時代に至るまでの東西文化交流を中国哲学とヨーロッパの哲学者の接触の過程として描いた『中国哲学とヨーロッパの哲学者』上下巻の著者堀池信夫が、やはり出発点として描いている(堀池(一九九六)、同(二〇〇二))。何故この時代が出発点なのか。シルクロードを通じた物的・文化的交流は確かに存在していたが、この時代に元、またモンゴルの帝国による人的交流が深まっただけでなく、そうした中で、十一世紀以降存在してはいたが、必ずしも客観的とは言えなかった様々な

東方の情報が、プラノ・カルピニのジョヴァンニヤリユブリユク・ギョームらの旅行記により、新たに、より正確な形で書き換えられていったからである(堀池(一九九六)、一四一―一九頁)。そうした中で、中世における記号学の分野でも、また学問全般における経験的な要素を強調した人物としても知られるロジャー・ベーコンは、自身は実際には東方に足を運ばなかったものの、これらのより正確な情報を利用して、東方の諸宗教とキリスト教を比較し、ある種の比較宗教学のような分析さえ行っている(同、一三四―一五二頁)。それもまた非常に興味深いものであるのだが、その点については先ほどから言及している堀池(一九九六)に詳細な分析があるため、ここでは本稿の主題である中国の漢字に焦点を絞りたい。

当時の教皇に求められて送った『大著作』と呼ばれる代表作の中で、ロジャー・ベーコンは、情報源としてリュブリユク・ギョームの旅行記『イティネラリウム』に大部分依拠しつつも、当時の記号理論・言語理論の第一人者の一人である彼らしく、資料の少ない中では、それなりに正当な漢字の記述を試みている。基本的にはリュブリユク・ギョームの成果でもあるのだが、ロジャー・ベーコンの記述に即して見てみよう。ベーコンは、まずタルタル(モンゴル)の文字について記述した後、次の様に続けている。

チベットの人は私達と同様に書き、私達のものに類似した形態(の文字)(*figura*)を有している。タンゲートの人々は、アラビアの人達と同様に、右から左へと書くが、上に伸びる線がより多くなっている。東方のキタイ(中国)の人々は、画家が絵を描くのに使う筆(*punctorium*)を使って書き、一つの文字(*figura*)の内に複数の構成要素(*plures litterae*)を書き込み、これらの構成要素(の総体)が一つの語を表現している。このようにして、多くの構成要素を(自身の内に)同時に含む持っている文字記号(*characteres*)が生じるのである。それゆえに、これらは真の文字記号(*veri characteres*)であり、構成要素から合成される点で自然学的といっても良いものであり、(その一つ一つが)語(として)の意味を有するのである。

Thebeth scribunt sicut nos, et habent figuras similes nostris. Tangut scribunt a dextra in sinistram, sicut Arabes, sed multiplicat lineas ascendendo. Cathai orientales scribunt cum punctorio quo pingunt pictores, et faciunt in una figura plures litteras comprehedentes unam dictionem, et ex hoc veniunt characteres qui habent multas litteras simuli, unde

veri characteres, et physici sunt compositi ex literis, et habent sensum dictionum.

(ラテン語原文 三七四頁、英訳 三八九頁、邦訳 堀池 (一九九六)、一二五頁。ただし英訳と邦訳は、ラテン語の *dictio* を英語の *sentence* の意と解してしまっているため、ロジャー・ペーコンの真意を伝え損ねている。)

当時の言語理論で用いられる用語が使用されており、近代語への翻訳が難しい文章だが、指摘しているのは、筆によって書かれるという以外に、漢字の次のような特徴である。

- ①ここで構成要素と訳した *litera* は、確かにラテン語における文字の意味ではあるが、ラテン語文法家であるプリスキアヌスの伝統では「それ以上分割できない一つの音声を表わす最小単位」の意であり、人間音声の構成要素の記号であり、分節化された音声の像である(プリスキアヌス『文法教程』、第一巻、「*litera*」の章)。
- ②アルファベットが「一つの形態 (*figura*) = 一つの構成要素」という構造を持つのに対し、漢字は、一つの形態の内に、そうした構成要素を複数、しかも同時に含んでいる。

③こうして一つの形態に含まれた複数の構成要素は全体として一つの語 (*dictio*) を表現している。

④このような漢字のことを、ロジャー・ペーコンは *character* と呼んでいる(仮に区別のため文字記号と訳しておく)。これは、構成要素から合成されている点で、自然が要素(元素)から構成されているのと同様であり、自然科学的 (*physici*) と言えるものである(プリスキアヌスが、*litera* を元素 (*elementum*) のしるし (*nota*) と言っていることを念頭に置いていると思われる)。

こうした記述を総合すると、ロジャー・ペーコンが次の様に理解している可能性は存在する。一つの漢字は、複数の構成要素——その一つ一つが一つの音声を示す——を含み込み、ラテン語であれば *dictio* (ディクティオー) と六つのアルファベットで書かれる語を、「詞」という一つの形で表わしている、言い換えれば、漢字はその各部分が「d」「i」「c」「t」「i」「o」といった様々な個々の音声(音韻)を表わしている、と。そうだとすれば、確かに漢字の構造の理解としては誤解を含んでいるだろう。また、一つの漢字が必ず一つの意味を持つ語に対応すると読まれる記述も問題を含まないわけではないだろう。しかし、ロジャー・ペーコンは、漢字は単なる絵文字ではなく、構成する部分

に分解され得ることを理解し、アルファベットとは異なっているが、ある合理的な構造、自然科学的と言っても良い組み立てを有するが故に、真の文字記号 *character* と呼ばれるに値すると記述している³⁰。これは、ラテン・アルファベットとは異なる文字である漢字の原理を、合理的なものとして理解しようとしているのであり、彼の異文化に対する関心のあり方として注記されるべきである。また、ここで示されている定義が——構成要素が音声的なものであるかはおくとして——第三章で確認した現代言語学における漢字の「表語文字」理解と類似している点は、アルファベット文化圏における漢字理解の一つの類型の端緒としても理解されるだろう。十三世紀の、恐らくは最初の漢字との出会いの記録において、すでにこのような形で、たとえアルファベットの視点からであるにせよ、かなり踏み込んだ理解が成立していたのである。

なお、ロジャー・ペーコンは、特に漢字に言及してではなく、音声的言語記号一般に関しては、II章で確認したアリストテレスの見解、すなわち音声的言語記号は、第一に私達の中の心的イメージを意味表示し、それを媒介として外的事物を意味するという三項図式に対して、記号は直接事物を表示するという立場を取っている点で、新たな道を踏み出している (*Compendium studii theologiae*, ed.

1988, pars II, ch. 2, §§59-60, pp. 68-70)。こうした記号観の変化が漢字の理解とどのように繋がっているかについても、今後検討される必要がある。

V 『コインブラ註解』における転換

時代は下り十六世紀末から十七世紀初頭に入る。宣教師たちが多くアジアとヨーロッパを行き来する時代に、東方の文化についても新たな情報が数多くヨーロッパにもたらされる。その中で、漢字についても以前よりも詳細な情報を得た上で、後のライプニッツに繋がる漢字観が形成される。そうした時代において成立したのが『コインブラ註解』であり、西洋思想史上でも大きな影響を与えただけでなく、これは部分的に漢文訳されることで、東西文化交流史の上でも重要な意味を持つテキストである。

『コインブラ註解』とは何か。

この註解書は、コインブラ大学の自由学芸学部周辺に集まったイエズス会士達によって編纂された、当時も大学周辺で学問の基礎にあると考えられ続けたアリストテレスの一連の著作に対する八巻に及ぶ註釈書である。これは一五五五年にコインブラ大学で哲学を教えていたフォンセカに遡る内容を持ち、さらに若い世代のイエズス会士達に

よってコインブラ大学周辺で発展させられた議論の成果が取り入れられているだけでなく、十二〜十三世紀以来の盛期スコラ学の伝統に取り上げられている。加えて、こうした内容は無秩序にまとめられているのではなく、新しいカリキュラムとしての方針に従って構成されている点で (Doyle (2001) の序文を参照)、学問の歴史にとっても新たな一歩を開くものである。また、内容についても、それ以前の大学における書物では、一般的に他の (古い) 書物を通しての言及が中心であった異文化の出来事に対して、中国や日本の文化や、インドでの出来事への言及等、イエズスの活動を通じて集められた同時代的な新しい情報が盛り込まれており、当時の学問の開かれた状況の一端を知ることが出来る。

このようにして成立した一連の註解書は大きな反響を呼び、様々な版が重ねられ、広く流通する。スコラ哲学的な要素への親近感を示すライブニッツだけでなく、そうした伝統への反発で知られるデカルトも、またこの註解書に言及している (同、二〇頁)。また広く流通したという範囲には宣教先の土地も含まれ、実際にどの程度読まれたかについては疑問があるようだが、アリストテレスの『カテゴリー論』に当たる範囲は、漢文訳もされている (存在を巡る語法の翻訳を詳細に検討した深澤 (一九八六) を参照。また当時

の接触状況については Kurtz (2011) の第一章が詳しい)。

そうした『コインブラ註解』に漢字への言及が登場するのは、一六〇六年に正式な初版が八巻のシリーズの最後に出版されたアリストテレスの論理学について註解する巻の内、アリストテレスの『命題論』を註解している部分である。先にII章で確認したように、『命題論』冒頭部は (言語) 記号がどのように機能するかを冒頭で述べていることもあり、伝統的に、その部分への註解で記号のあり方についても様々な問題が論じられる。『コインブラ註解』においてもそれは同様であり、漢字への言及はその内、第三問題「音声記号と書字記号 (scriptura) の意味表示作用について De vocum, scripturarum significacione」の第四項「書かれたものは音声記号を意味表示するのか。またその場合どのようにか An scripta significant voces, et quo modo?」に現われる。第三問題で問われているのは、音声記号として意味表示を行うとはどのようなプロセスであるかということであり、それに付随して、書かれたものが意味表示するとはどのようなことであるかが第四項で、アリストテレス的な図式を前提としつつ、数多くの異論と共に検討されている。スコラ的な討論スタイルの書物の一般的なスタイルとして、著者達の見解と、それに対する異論、またそれに

対する異論回答が続く構成となっているが、漢字についての言及は「書かれたものは、音声記号が事物を意味表示するのと同様の意味表示作用による、ただし音声記号は内在的に、書字記号は外在的に」という著者達の見解に対する二つ目の異論として現われる。

二つ目に次の様な異論が提示されるかもしれない。象形文字（ヒエログリフ）は、フィチーノがプラトンの『ピレボス註解』二九章で説明するように、それを発明したザラスシュトラの後を受けたカルデア人達によって、またメルクリウスを発明者とするエジプト人達によって使われていた。そしてまた今日、中国と日本人の人々によって使われている。これらの文字は、何ら音声を指し示すことなく、事物を意味表示する。それ故、これらの文字は固有の意味表示を有し、またそれは文字自身に内在的なのである、と。

Oppones secundo, Scripturae hieroglyphicae (quibus utebantur Chaldaei sequuti Zoroastrem eorum inventorem, et Aegyptii, inventore Mercurio, ut auctor est Marsilius Ficinus in Platonem de summo bono cap. 29. et utuntur hodie Sinarum, et Japoniorum populi) immediate significant res

nullas indicando voces; ergo habent peculiarem significationem, et sibi intrinsicam. (Doyle (2001) 一〇八頁)

この異論は、著者達の見解——先に確認されたアリストテレスの図式に従い、書かれたものが記号として機能するために音声記号を経由する、あるいはそれを媒介とする必要がある——に対し、異論が象形文字と呼ぶものを反例として持ち出している。ここで象形文字と呼ばれるのは、ルネサンス以降、極一部の著作に限定されることなくきちんとした形で再び読まれ始めたプラトンへのフィチーノの註解を引用しつつ、カルデア人、エジプト人達が用いていたもの、それらに加えて、今日、中国と日本で使われているとされる書字記号である。そして異論は、これらの文字は、音声を指し示すことなく、事物を意味表示するのだから、そこには書かれたものに固有の意味表示作用があり、それは音声を媒介しない点で、自らに内在する意味表示作用であるのだ、と結論する。

ここまでであれば、古代ギリシャ以来のエジプト的な神秘への言及に、中国と日本の同時代的知見が加わりはしたものの、理論的にそれほど興味深いものはないのではないか、という印象を持つかも知れない。だが、これに続く著

者達の反論は、象形文字の意味表示作用を次の様に解釈する形で提示される。

答えて言おう。先ほど言及されたすべての記号は、本来の意味では書字記号 (*scripturae*) ではなく、事物を直接的に意味表示するために案出されたある種の図形 (*quaedam figurae*) なのだ。同じように算術における数は事物の確固とした総数を意味表示するのであり、数学者達〔当時は天文学もその一分野である〕の用いる図形 (*imagines*) は天体や星座を意味表示するのである。

しかしここで私達は、後に引用するアルベルトゥス・マグヌスやアウグスティヌスが述べるように、書字記号 (*scriptura*) という名で、部分ないし構成要素が組み合わさって生じるものを念頭に置いているのだ。

Respondetur omnia illa signa, quae afferuntur, non esse proprie scripturas; sed quasdam figuras inventas ad significandas res immediate. Ad eum modum Arithmeteorum numeri significant certam rerum summam, et Mathematicorum imagines, planetas, constellationesque representant.

At nobis hoc loco, ut non est sermo nisi de voce

dearticulata, sicuti ait Albertus, et Augustinus infra citandi, ita nomine scripturae intelligimus eam, quae coalescit ex partibus, seu literis. (同)

最終的に——そしてやや先を急ぐかのように——先の異論が持ち出した象形文字の反例としての資格は、それらここで念頭に置かれている書字記号ではないという形で否認されるが、ここでは、こうした否認の身振りも含めて、漢字を含む象形文字と彼らが見なすものについての興味深い見解が現われている。要約してみよう。

- ①異論が「象形文字」として提示したものは、書字記号 (*scriptura*) ではなく、ある種の図形 (*figurae*) である。
- ②ある種の図形であるとは、その意味表示作用が算術における数、天文学における図形 (*imagines*) と同様であるという意味である。
- ③それらの図形は、音声記号なしに（音声的な回路を經由することなく）直接事物を意味表示するものとして案出されたものであり、そのような形で直接的な意味表示作用を持つ。
- ④他方、() で書字記号という名で検討しているものは、部分ないし構成要素 (*literae*) が組み合わさって構成

されるタイプのもの、アルファベットのようなものに限定される。

つまり、著者達は、自分達が論じているのはアルファベットのような各部分が音声を表現し、それらが結合して一つの語となるという構成を持つ書字記号のことであるとし、象形文字はそうした記号ではないとして、その反例としての成立を否認する。つまり、漢字を含む象形文字に、アルファベットと同等の地位を認めない。この点では、先に見たロジャー・ベーコンのような形で、漢字を表語文字と理解するのは異なっている。では、漢字をある種の絵文字として理解しているのだろうか。この点については、一方で天文学における図形にも言及しつつも、算術における数のようなものもしている点で、それほど単純な見解を提示している訳ではないだろう。というのも、算術における数と実際の事物の間には端的な類似関係があるわけではないからだ。だとすれば、あくまでも音声記号を介さない記号として、直接事物を意味表示しているという点が重要な点になる。著者等はここでそうした性質を積極的に評価しているわけではないが、こうした見解は、やがてライプニッツによる二進法の原理を具現化したものとしての易の再発見と漢字の礼賛と、漢字の理解については基

本的な見解を一にしている。現代的な分類との関係をあえて語れば、表意文字あるいは思考文字という分類に近いものだろうが、漢字（象形文字）に厳密な意味での書字記号という地位は否定しながらも、数学的な記号に近いものと語ること、それらを操作することである種の知を得ることが出来るような記号としての地位を認めているのである。

VI 終わりに

V章で確認された、漢字を数学的記号に類似したものと考える視点は、やがて易に二進法の一つの実現を見るライプニッツによって引き継がれ、ライプニッツはそのような起源から発展したものととして漢字を礼賛する。だがそうした文字観は、アルファベットこそ精神にふさわしい文字であると考えるヘーゲルによって、激しく非難されることになるだろう。ヘーゲル的な漢字や象形文字否定の原型も、それらの文字性を否定し、アルファベットとは異なるところで本来言及されるものではないと排除する形で『コインブラ註解』は、すでに潜在的に含んでいた。これらのその後の展開については機会があれば改めて論じたいが、基本的なラインは第一章で言及したジャック・デリダによって与えられている（『グラマトロジーについて』、『哲学の余白』）。

私達が本稿で確認したのは、そうした比較的良く知られたエピソードに対して、それ以前の段階で、そうしたエピソードを形作ることになる下地は既に作られていたということであった。ロジャー・ベーコンの控えめながら驚きを秘めた分析、あるいは『コインブラ註解』における数学的記号に類比されるものとしての漢字（象形文字）、しかし同時にその議論からの周到な排除、いずれにせよそうした驚きには、裏を返せば、アルファベットとは全く異なった原理によるものとして漢字を把握する、ある種のオリエンタリズム的視線が導入される危険も存在している。

ところで、Ⅲ章では、現代の言語学における実験が示唆するところによれば、文字としての漢字と文字としてのアルファベットの処理は、両者とも意識に上らないレベルにおいては、必ずしも全く異なったものではなく、音韻表象を經由するルートと、視覚表象から直接に辞書にアクセスする二つ存在する経路をどちらもが利用されており、ただ、それらの内どちらがより活性化されるかというタイプの違いであるということが確認された。

他方、Ⅳ章、Ⅴ章で確認してきた中世、大航海時代のヨーロッパの哲学者・神学者達の漢字観は、アルファベット文化の中で育った人間の意識に対して、漢字がどのように現われ理解されるかを示してくれている。そして、Ⅲ章で確

認した現代の言語学における文字の分類における漢字の揺れのある二重の位置——一方で、表語文字であり、他方で表意文字である——は、それぞれⅣ章とⅤ章の漢字観に近いものであった。この意味でアルファベット文化圏の視線に対して漢字がどのように映るかの基本的ラインは、かなり初期の接触時点から現在に至るまであまり変化していない様に思われる。つまり現代の言語学においても、漢字を理解する視線は、ヨーロッパにおける漢字との接触の長い伝統に規定されたままである可能性がある。

以上の短い探究から結論できることは、私達が理論的に、あるいは日本語教育と言った実践的な観点から、人間言語の一つの表記の様式としての漢字について考察する際に必要とされるのは、アルファベット文化圏の視線に映ずる漢字像がヒントを与えてくれることに留意しつつも、それらがオリエンタリズム的視線に陥る危険に留意して、アルファベットを中心とした文字観が打ち立てる傾向があるアルファベットと漢字との過度の対立とは異なった道を探究していくということではないだろうか。そのための予備作業として、現代の言語理論の基礎となっている長い伝統に注意深く踏み込んでいく必要があるのである。

〈注〉

1 なおオカンの文字論における日本語の位置をより正確に把握するためには、「リチュラテール」として出版されることになる講義（セミネール）も検討する必要がある。山城（二〇〇五）は「リチュラテール」の問題を検討している。2 これまでの論争を総括した邦語文献として、周藤（二〇〇七）を参照。

3 残念ながら彼はこの論点をこれ以上展開してはいないが、次の章で見るような、漢字を数学的記号と類似したものとする視線と同様に、自然界の構造を写し取るような記号として把握している可能性を示唆している。Characterという語もライブニッツまで繋がる系譜を思い起こさせるものがある。

4 確かに中世の大学においても、大学の課程において、講読されるべき書物は指定されており、それを教科書と呼ぶのであれば、教科書は存在していた。また、ある分野で講読されるべき書物に対する標準的な註解が成立していれば、それも共に参照され、実質的に教科書と呼べるものが存在していたと言うことは出来るだろう。しかし、哲学的諸質問全体をある理念に基づいてカリキュラムとして組み立てたということは、一連の『コインプラ註解』において始まった出来事だと思われる。

5 もちろん、先に見たように、現代的な文字の分類では書字記号が直接的な事物を指し示すという訳ではないが、スクラの用法において、事物 (res) は、外的事物と概念的な心の中の事物の両方を意味することが多く、大きく乖離しているわけではない。

〈参考文献〉

- アリストテレス 『命題論』、早瀬篤訳・解説、アリストテレス全集1（カテゴリー論、命題論） 二〇一三年、岩波書店、一〇三―一八四頁
- ヴォルビヨワ、ガリーナ（二〇一四a） 『構造分解とコード化を利用した計量的分析に基づく漢字学習の体系化と効率化』、政策研究大学院大学博士論文
- ヴォルビヨワ、ガリーナ（二〇一四b） 『漢字を習得すること、教えることの難しさ——体系化をめざして』 『HUMAN』第七号（二〇一四年二月）、一〇二―一〇六頁
- カイザー、シユテファン（二〇〇二） 『留学生（非漢字圏）の日本語力はなぜあがらないか』 『筑波フォーラム』、第六一―号（二〇〇二年三月）、三七―四一頁
- 門田修平（二〇〇六） 『第二言語理解の認知メカニズム——英語の書きことばの処理と音韻の役割』、くろしお出版
- 子安宣邦（二〇〇三） 『漢字論——不可避の他者』、岩波書店

佐々木孝次(二〇〇七)『文字と見かけの国——バルトとラ

カンの「日本」——』、太陽出版

周藤多紀(二〇〇七)「ΣYMBOLON、ΣHMEION
N、NOTA——ポエティウスによる『命題論』(16a38)
のラテン訳」、『中世思想研究』第四九号、中世哲学会、三七
—五四頁

瀬田幸人(二〇〇九)「文字論」、『言語学の領域(II)』、今井
邦彦編、朝倉書店、一四九—一七九頁

深澤助雄(一九八六)「『名理探』の訳業について」、『中国——
社会と文化』、第一号(一九八六年六月)、東大中国学会、
二〇—三三頁。

堀池信夫(一九九六)『中国哲学とヨーロッパの哲学者 上』、

明示書院

堀池信夫(二〇〇二)『中国哲学とヨーロッパの哲学者 下』、

明示書院

山城むつみ(一九九五—二〇〇九)『文学のプログラム』、講

談社文芸文庫(初出 太田出版)

山城むつみ(二〇〇〇)「坂口安吾とリチュラテールをめぐる

四つのノート」、『早稲田文学』(第九次)、第二五卷(三号)

(二〇〇〇年五月)、早稲田文学会、四〇—四八頁

ラカン、ジャック(一九七二)『エクリ』 宮本忠雄、竹内迪

也、高橋徹、佐々木孝次訳、弘文堂

Bacon, Roger *Opus maius*, 3vols., edited by J. H. Bridges,
vols. 1&2, Oxford 1897, vol. 3, Edinburgh, 1900.

-*The Opus Majus of Roger Bacon* (English translation),
2vols., translated by R. B. Burke, Russel & Russel Inc.,
1962.

Bacon, Roger *Compendium studii theologiae* (*Compendium
of the Study of Theology*), edited by T. S. Maloney, Brill,
1988.

Doyle, John P. (2001) *The Conimbricenses: Some Questions
on Signs* (some parts of the *Conimbricenses*, including
English translation with introduction and notes), Marquette
University Press.

Kurtz, Joachim (2011) *The Discovery of Chinese Logic*, Brill.
Lacan, Jacques (2001) *Autres écrits*, Seuil.

※ 本研究の一部はJSPS科研費
26370083の助成を受けたものです。